

大轉子骨結核ニ就イテ

金澤醫科大學熊笹御堂外科教室(主任熊笹御堂教授)

副 手 田 上 幸 治 郎

Kojiro Tagami

(昭和13年12月7日受附 特別掲載)

内 容 抄 録

大轉子骨結核ハ決シテ稀有ナ疾患デハナイガ同疾患ノ經過ヨリ如何ニ荷重ガ骨、關節結核ニ大キナ役割ヲ

演ズルカラ知ツタ。

大轉子骨結核ハソノ解剖學的位置ノ關係カラ體重負擔ノ主軸ヨリ逃避シ恰モ樹枝ノ側枝ノ如ク位置スル故他ノ股關節、足關節、足趾骨ノ如ク樹幹ノ位ニアル部分ノ結核ニ比シテソノ症狀、經過等ハスベテ緩漫ナル傾向ヲ示シテ居ル。

余ハ數年、十數年ニ亙リ存在シ日常生活ニ殆ンド支障ヲ來サナイ大轉子骨結核患者二例ヲ診テ骨、關節結核ノ經過ニ如何ニ荷重ガ關係アルカラ教ヘラレタガ併セテ少シク大轉子骨結核ニ就イテ述ベタイ。

骨及ビ關節結核ナル名稱及ビ概念ハ主ニ Billroth, Volkmann 及ビ König 氏等ノ研究ニヨリ明カニサレルニ至ツタガ之ハ僅々六、七十年前ノ事ニ屬シテ居ル。ソレガ1882年 Robert Koch 氏ニヨリ結核菌ノ發見ヲ見テカラハ急速ニ各種ノ結核病ノ本態ガ鮮明ニサレルノ一部トシテ骨及ビ關節結核ノ研究、報告モ増加シ汗牛充棟ノ觀ヲ呈スルニ至ツタ。コノ事ハ我々臨床醫モヨク經驗スル所デ骨、關節結核ハ日常極ク普通ニ遭遇スル疾患ト化シテシマツタ。

シカルニ大轉子骨結核ハ同ジ部門ニ入ル疾患デハアルガ比較ノ少數デ D. Pacini et C. P. Jancheri 氏等ニヨレバ全骨結核ノ1.07%ヲ占メルト云ハレ、Clairmont, Winterstein, Dintza 氏等ニヨレバ0—2%ノ頻度ヲ持つノミト云ハレ又本

邦ニ於テモ加藤、行岡氏等ハ1112名ノ骨、關節結核患者ノ裡大轉子骨結核ハ2例アツタ事ヲ報告シテ居ル。

コノ事ハ以上數氏ノ記載ノミデナク一般ニ大轉子骨結核ハ骨結核トシテ稀有ナモノデ我教室ニ於ケル記録ニモ現今迄11症例ヲ見ルノミデアル。

今大轉子骨結核患者ノ年齢、性及ビ患側ヲ報告例ニ從ツテ記載シテ見ルニ次ノ如クニナル。

1. Clairmont 氏等報告例(4名):

11歳男性(患側不明), 20歳男性(右側),
10歳男性(右側), 49歳男性(患側不明)。

2. H. Niecke 氏報告例(1名):

39歳女性(右側)。

3. W. Boss 氏報告例(1名):

18歳女性(患側不明)。

4. H. W. Meyerding and K. J. Mroz 氏報告例(19例):

男性 10例, 女性 9例,
平均年齢 35歳(最高65歳, 最低21歳),
患側 右側14例, 左側5例。

5. D. Pacini 氏等報告例(34例):

内容ハ不明ダガ20歳, 30歳代ノ患者ガ最も多イ。

6. 加藤、行岡氏報告例(2名):

詳細ハ不明ダガ何レモ20歳前後.

7. 我教室ノ記載例(11例):

新田某 10歳, 男性, 右側
 若林某 18歳, 男性, 左側
 山本某 21歳, 男性, 右側
 石野某 23歳, 男性, 左側
 久保某 26歳, 男性, 右側
 越村某 28歳, 男性, 右側
 田邊某 28歳, 男性, 右側
 山下某 36歳, 男性, 左側
 崎山某 38歳, 男性, 右側
 小林某 58歳, 女性, 左側
 深谷某 59歳, 男性, 右側

一般ニ骨, 關節結核ハ20歳代ニ最モ多ク見ラレ(約30%), 10歳代(約20%), 10歳以前及ビ30歳代ハ約10%ノ頻度ヲ持テ後子年齢ノ増加ニツレ減少シ80歳以上ニナルト僅カニ2%ヲ見ルノミトナル. 又性及ビ患側ニヨル相異モ大體 δ :
 ϕ = 6:4, r : l = 5:4 デ男性患者ガ多クテ且右側ニヨリ見ラレル.

今迄報告サレタ大轉子骨結核モ大體コノ説明ニ一致シ, 余ノ症例ニアツテモ20歳代ガ5例(45%), 10歳代ハ2例(18%)デ30歳代, 50歳代モ同ジク夫々2例宛ヲ見テ居ル. シカシ30歳代ニ含有センメタ崎山某ハ既ニ10年來ノ疾患デ又50歳代ニイレタ小林某モ32歳ノ頃ニ發病シテ居ルノデ發病當時ノ年齢カラ見レバ20歳代ノモノガ6例(54%), 50歳代ノモノハ1例(約1%)ト云フ事ニナル. 次ギニ大轉子骨結核患者ノ性及ビ患側ニヨル相異モ比較的ソノ報告例ノ豐富ナH. W. Meyerding 氏ニヨレバ, r : l = 14:5, δ :
 ϕ = 10:9, D. Pacini 氏等ニヨレバ男性, 女性殆ント同數ノ患者數ヲ見テ居リ, 余ノ症例デハ
 r : l = 7:4, δ : ϕ = 10:1 デ等シク右側ニ多ク且男性ニ於イテ頻度ノ高イ事ヲ示シテ居ル.

コノ事ハ概シテ男性ガ社會的ニ女性ヨリ活動的地位ニ於カレ從ツテ骨, 關節結核ノ誘因トシテ屢々重要視サレル外傷ニ曝サレル率ガ高イ事ニモヨルノデアラウ. 之ハ右側ガ左側ヨリ多ク罹患スル理由ニモナリ得ル. 即チ H. W. Mey-

erding 氏等ノ報告例全19例ノ大轉子骨結核患者ノ裡5例ハ既往歴ニ外傷ヲ有シ, H. Niecke 氏ノ報告例デアル39歳ノ女性患者ハ右側大轉子骨部ニ腫脹ヲ見ル4年前ニ一度顛倒シ同所ヲ強打シ爾後疼痛ガ不連續的ニ現出セル事ヲ述ベテ居ル. 余ノ症例ニアツテモ崎山ハ發病前數年ニ又小林ハ約1ヶ年前ニ外傷ヲ受ケタ事ヲ認め且H. Niecke 氏ノ報告例ニヨリ類似ノ經過ヲ示シテ居ル.

其他既往歴トシテハ結核性疾患及ビ遺傳的關係モヨク論ゼラレル所デ一般骨, 關節結核患者ニアツテモ66.7%ノ多數ガ一度結核性疾患ヲ經過シ(ソノ59.6%ハ肋膜炎疾患デアル)又30.5%ノ遺傳的素質ヲ有スト云ハレテ居ル. 大轉子骨結核ニアツテモソノ例ニ洩レズ H. W. Meyerding 氏等ノ報告例デハ73%ノ多數ガ結核性疾患ノ既往歴ヲ有シ(ソノ裡42%ハ肺結核ナリト), 又 D. Pacini 氏等ハ全患者ノ20%ニ亙ツテ遺傳的關係ヲ認メテ居ル. 余ノ症例ニアツテハ崎山ハ約20年前ニ結核性腹膜炎ヲ患ヒ, 田邊ハ27歳ノ時右側滲出性肋膜炎ニ侵サレ, 又山本ハ大轉子骨部ニ壓痛ヲ覺ヘル一年以前ニ左側乾性肋膜炎トシテ醫療ヲ受ケテ居ルガ他ノ8例ハ殆ンド特記スベキ疾患ヲ經驗シテ居ナイ. 又遺傳的關係ニアツテハ不明ノモノガ大多數デ之ニ就イテハ餘リ記載スル程ノ結果ヲ見ナイ.

發病當時ノ初發症狀ハ患部ノ疼痛(山下, 新田, 山本, 久保)及ビ腫脹(深谷, 崎山, 越村, 田邊, 小林)ニ二大別サレ何レモ歩行困難, 發熱又ハソノ他ノ違和感ヲ伴フハ又ヲ普通トシテ居ル. ソノ腫脹ハ局所ノ循環系ノ變調ニヨリ軟部ニ丈見ラレル事ガアルガ多クハ骨組織ノ肥厚及ビ結核性肉芽組織ノ溢出ニヨル事ガ屢々デヤガテ化膿シ所謂寒性膿瘍ヲ形成スルノガ普通デアル.

又疼痛モ初期ニアツテハ一般骨, 關節結核症ノ場合ノ如ク時ニ覺エ時ニ消失シスクテ壓痛叩痛ノ現出迄ニ進展スル. 從ツテヨク「ロイマチス性疾患ト混同サレ荏苒數ヶ月又ハ十數年ノ長期ニ亙リ保存的療法ニ委ネラレル例ガ多ク余ノ

症例ニアツテモ二、三ソノ例ヲ見テ居ル。又小兒ニアツテハコノ永續性治癒困難ナ疼痛ノ他ニ食思不振、睡眠不良、體重減少、不安等ヲモ伴ヒクル事ガ多イ。

寒性膿瘍ヲ形成スルモノハ又屢々自壊シ瘻管トナリソノ周圍ノ皮膚ニ結核性潰瘍ヲ作ル様ニナル。且腐骨ノ排出モヨク見ラレル。

カ、ル状態ニ迄病勢ガ進行シテモ患者ノ全身症状ハ一般ニ良好デ混合感染其他ノ不快ナ合併症ガナケレバ單ニ保存的療法ニ依ル丈デモ相當長年月ニ亙リ日常生活ニ充分從事シ得ラレルモノデアル。之ハ大轉子骨部ハ解剖生理學的ニ見テ關節又ハ多クノ關節附近ノ骨ノ如ク外力ガ直接同所ニ負擔ヲ與ヘズ力線ノ作用主軸ヨリ避ケ居ルタメニヨルモノデアラウ。余ノ症例ニモ之ニ屬スルト見做サレルモノニ二例ヲ數ヘル故簡單ニソノ病歴ヲ記載シテ見ヤウ。

1. 崎山某, 男, 38歳, 漁業.

約20年前ニ顛倒シ顔面、兩手ト同時ニ右側大轉子骨部ヲ打ツ。爾來同所ニ鈍痛ヲ訴ヘタガ何等仕事ニ支障ヲ來サズ數年ヲ經タガ暫テ右側大轉子骨ガ腫脹シテクルノニ氣付キ醫者ニヨリ同所ニ切開手術ヲ受ケタ。患者ノ記憶ニヨレバソノ時膿汁ト共ニ小サナ腐骨モ排出サレソノ手術創モソノ後暫ク瘻孔トナリ殘ツタガ他ニ何等ノ違和感ナシニ經過シタ。シカルニ一昨年再ビ一時完全ニ閉鎖ヲ見タ前記手術部ノ腫脹ヲ見膿汁ノ流出モ多ク腐骨ノ排出モ見ルニ至ツタ。腐骨ハ本年2月初旬ニモ2個自然排出スル。

カクテ發病後少クモ10年以上ノ年月ヲ關シテ居ルガ殆ンド自覺的ニ顯著ナ障害ヲ認メズ、歩行困難スラ來サズシテ當科ヲ訪ネル。(附圖參照)

2. 小林某, 女, 58歳, 無職.

32歳ノ時左側大轉子骨部ヲ下ニシテ顛倒シ同所ヲ強打シタガ暫ク違和感ナシニ過ギタ。ヤガテ漸次同所ニ腫脹ヲ來タシ某醫ニヨリ切開手術ヲ受ケ、ソノ手術創ハ瘻管トナツタガ相當期間後自然ニ閉鎖スル。シカルニ又暫時ニシテ同所ヨリ小豆大ノ小腐骨ノ自然排出ヲ見、ソノ瘻管ハ又閉鎖スルニ至リ、カ、ル事ヲ數次繰リ返シテ今日ニ到ルガ歩行ニ不自由ナク股關節運動ニ支障ヲ訴ヘヌ。

局所ニハ手術痕痕創及ビ瘻管ノ形成ヲ認メル。普通歩行ニハ全ク差支ヘナク只早ク走ル時極輕度ノ跛行ヲ示スガ他ニ全ク自覺的、他覺的障害ヲ認メナイ。(附圖參照)

大轉子骨結核ノ診斷ハ前記ノ如クソノ發病初期ニ於テハ甚ダ漠然トシテヨク他ノ慢性ノ諸疾患、論エバ神經痛、「ロイマチス性疾患ト誤マラレ安イガ尙既往歴ニ外傷ノ有無、治癒困難ナ永續性ノ自然痛、壓痛ノ存在ガ參考トサレ且原則的ニ膀關節運動障碍ノ作ハヌヲ常トシテ居ル。又「レントゲン寫眞ニテ大轉子骨ノ萎縮消耗又ハ乳酪様病竈、空洞ヲ認メルナラ診斷ハ更ニ確實性ヲ増ス。

ソノ治療方針トシテハ手術療法ヲ採ルノガ最良デアル。但シ年少者ニハ或ハ保存的療法ヲ加ヘルノモ一ツノ方法カモ知レヌガ一般ニ長時日ヲ要シ且再發ヲ絕對的ニ防止デキナイ。余ノ症例ニアツテハ前記崎山、小林ノ二例ハ極力入院手術加療ヲ勸メタガ既ニ數年、十數年ニ亙リ現狀ニトドマル故今更經濟的支出ヲシテ迄モ手術ヲ要セズトテ之ニ賛成シナカツタガ他ノ症例ニアツテハ手術療法ガ奏効シ多クハ再發ノ憂目ヲ見ズニ長年月ニ亙ルヲ見タ。

結 語

余ハ我教室ニ記載サレテ居ル大轉子骨結核症十一例ヲ得テ次ノ結果ヲ得タ。

1) 全患者ヲ發病當時ノ年齢別ニシテ見ルト十歳代二例、二十歳代六例、三十歳代二例、五十歳代一例トナル。

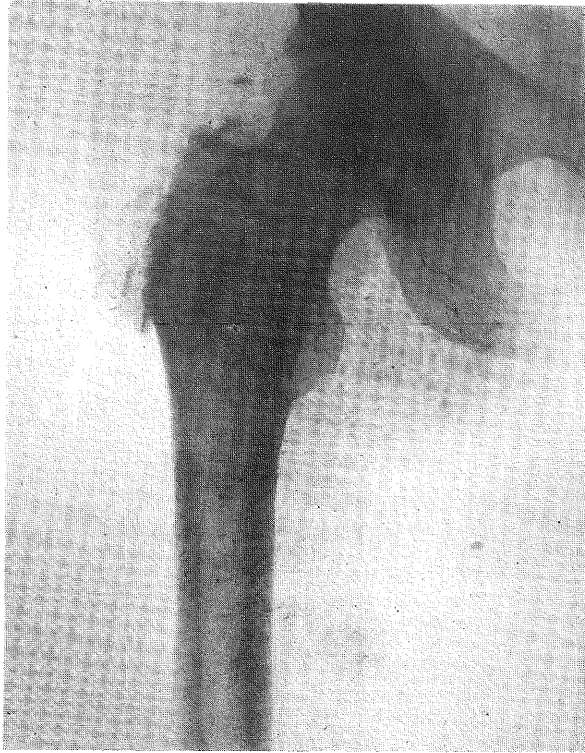
2) 全患者ヲ性別ニスレバ男性十名、女性一

名デ男性患者ガ壓倒的多數ヲ占メテ居ル。

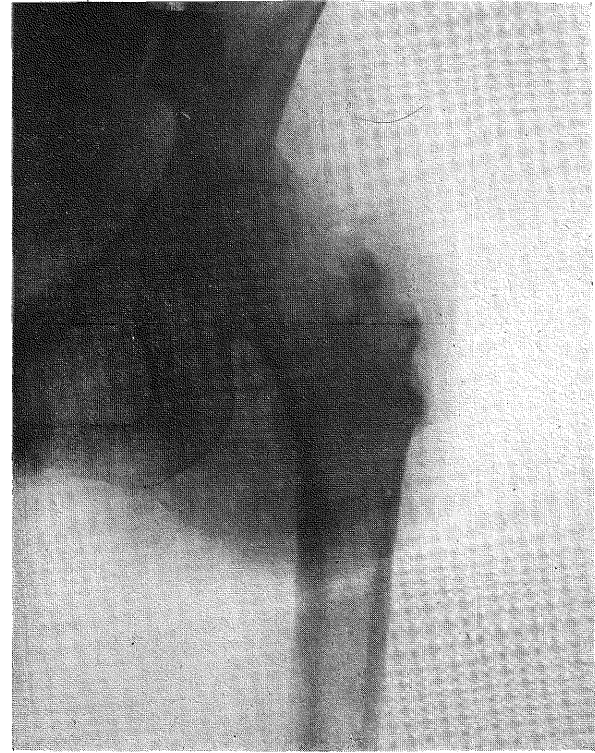
3) 又患側別ニスレバ右側七名、左側四名デ之ハ男性患者ガ多イ事ト共ニ骨、關節結核ノ誘因トシテ屢々重要視サレル外傷ニ曝サレル率ガ高イ事ニヨルデアラウ。余ノ症例ノ裡二名ハ誘因トシテ外傷ヲ認メテ居ル。

田 上 論 文 附 圖

崎 山 某, ♂, 38Ij



小 林 某, ♀, 58Ij



4) 既往歴ニテ結核性疾患ニ罹患セルモノ三名ヲ認メタ。遺傳的關係ハ不明デアアル。

5) 大轉子骨結核ハ一般ニ良性ノ經過ヲトリ余ノ症例ニアツテモ十年、二十年ノ長期ニ亘リ

テモ尙歩行困難ヲスラ起サヌモノ二例ヲ見タガ、之ハ關節又ハ多クノ關節附近ノ骨ノ如ク外力ガ直接同所ニ負擔ヲ與ヘズ力線ノ作用主軸ヨリ避ケ居ルタメニヨルモノダラウ。

主ナル文獻

1) **August, Bleucke:** Die Behand der Knochen u. Gelenktbc, Brun's Beiträge z. klin. Chir. Bd. I. XXVI, H. 1, S. 182 (1922). 2) **Boss:** Zentralbl. f. Chir. 1927, S. 1135. 3) **Clairmont, Winterstein, Dimtza:** Die Chirurgie d. Tbc. 1931, Berlin. 4) **Fischer:** Knochen u. Unfall Zentralbl. f. Chir. 1935, S. 2542. 5) **Mahler:** Über Behand u. Verlauf gelenknaher tuberculoser Knochenende, Arch. klin. Chir. 178, 526/540 (1933). 6) **Meyerdig & Mroz:** Tbc of the greater Trochanter, J. Amer. med. Assoc. 101,

Nr. 17, P. 1308 (1933). 7) **Niecke:** Ein Fall von isolierter Trochanter Tbc. Zentralbl. f. Chir. 1927, S. 1134. 8) **Oehlecker:** Tbc d. Knochen u. Gelenke, 1924. 9) **Pacini et Jancheri:** Leosteiti tuberculari del grande trocantere, Zentralbl. f. Chir. 1934, S. 365. 10) **Rauber-Kopsch:** Lehrb. u. Atlas der Anatomie des Menschen. Abt. z. 14 Aufl. 1932. 11) **加藤喜久男, 行岡尙,** 骨, 關節結核ノ統計的觀察. 大阪醫事新誌, 第5卷, (昭9), 840頁, 980頁, 1272頁, 1384頁. 第6卷, (昭10), 388頁.